

「ミルワード神父のシェイクスピア物語」第五回（2015.10.3）復習と解説

「ミルワード神父のシェイクスピア物語」の第五回目のお話を、他の回と重なる個所を省略して復習することにいたしましょう。

神父様は、2003年にルネッサンス・モノグラフ 30号 *Shakespeare's Meta-drama—Hamlet and Macbeth* と 31号 *Shakespeare's Meta-drama—Othello and King Lear* を発表されましたが、2013年には、eBookとして四冊に分けた形式で出版されました。第五回では、『ハムレット』に焦点を当てて、メタ・ドラマの視点から劇を分析なさいました。

神父様は、A. C. Bradleyが四大悲劇に『ハムレット』を含めているけれども、『ハムレット』のみがエリザベス朝に書かれた悲劇であり、比類なくユニークであることを考慮すると、四大悲劇の枠に含めて、ひと括りすることに異議を唱えられました。シェイクスピアの劇はすべてユニークだけれども、中でも『ハムレット』は“uniquely unique”で、いかに他の劇とは異質であるかを丁寧にご説明くださいました。

ユニークである理由として、『ハムレット』が悲劇でも復讐悲劇でもなく、問題劇であると最初に指摘されました。一般に問題劇と言われている『終わりよければすべてよし』、『尺には尺を』、『トロイラスとクレシダ』の問題は、実はあまり問題ではありません。むしろ、『ハムレット』こそ問題劇であると断言されたのです。

『ハムレット』の問題の中で幽霊が問題です。劇はバーナード（Barnardo）の“Who's there?”という台詞で始まります。歩哨の任務についていないバーナードは何か気配を感じ、幽霊ではないかとの恐怖心から発した言葉でした。デンマークの元国王の幽霊が、なぜ墓から出てきたのが、劇の問題なのです。

次に女主人公の問題です。シェイクスピアの劇で『十二夜』までの女主人公は、聖母マリアを想起させるような理想的な女性が大部分でした。ところが、『ハムレット』では、ハムレット（Hamlet）の母ガートルード（Gertrude）は、夫を裏切った女性“Frailty, thy name is Woman!”であり、恋人オフィーリア（Ophelia）は父親の言いなりになり、ジュリエットのように愛を貫く女性ではありません。つまり問題を抱えた女性の存在が劇の問題であると指摘されました。

更に、新旧のデンマーク王を通して新旧のイングランドが対比されます。ハムレットは16世紀に創設されたウィッテンバーク大学に留学し、プロテスタント教育を受けています。一方、父親は、死の準備としてのカトリックの三つの秘跡、つまり、聖体拝領、告解、塗油を受けることなく毒殺され、カトリックの教義にある煉獄からやってきた幽霊です。イングランドは1558年までカトリックでしたが、ヘンリー八世の意向を汲んだエリザベス女王は、プロテスタントのイングランド国教会の支配を望み、イングランド国教会を国内に定着させようと努めます。その目的を達成するために、女王の懐刀だったバーリー卿がカトリックの迫害を行いました。そのバーリー卿を想起させる登場人物が、オフィーリアの父親ポローニアスが登場です。ぽろーにあすは、クローディアスとガートルードの新体制

樹立を手助けした人物として描かれています。

ハムレットは、第一独白で “O that this too, too, solid flesh would melt...”と心の中を語ります。ハムレットは膨大な台詞を語る主人公ですが、“I must hold my tongue!”と述べる個所がございます。では、なぜハムレットは口を閉じなければならなかったのでしょうか？

メタ・ドラマとは、ドラマの向こうに見えるテーマ、言葉には隠れているもの、T.S. Eliotの言うところの “The objective correlative” に目を向けます。ハムレットの言葉の意味を理解するためには劇の向こうに存在するものをとらえなければなりませんと神父様は説明され、メタ・ドラマの重要性を強調されました。

国王のスパイ、ギルデンスターンとローゼンクランツはハムレットの心中を探ろうとします。けれども、ハムレットは断固拒絶します。ハムレットの言葉の背後にはシェイクスピアの言葉が潜み、謎に満ちています。では、なぜシェイクスピアの劇は謎（エニグマ）なのでしょう？

『ハムレット』では、ポローニアスとクロードィアスがハムレットをスパイし、ハムレットもクロードィアスをスパイします。イングランド国教会の教会に通わないレキュザントがスパイされ、迫害された現実が劇に投影されていると指摘されました。

クロードィアスはハムレットの父を殺害しましたが、シェイクスピアは、良心の呵責に悩む悪人として描き、悪人でも悔い改めれば悪人ではなくなることを示し、同時に、罪を犯したハムレットは悪人となることを示します。つまり、人は変わることができる存在であることを描いているのです。神父様は、シェイクスピアの劇には、表層的な意味、次に聖書の影響、深層にはエリザベス時代のカトリックの思いが響いていると説明されました。

2012年出版の *The Pattern in Shakespeare's Carpet* のタイトルに関して、シェイクスピアの劇全体を読んで初めて、シェイクスピアの意図が読めることを踏まえ、シェイクスピアの全作品が描き出す「絨毯の模様」を読み解く必要性を込めたタイトルであるとのこと説明がございました。

第二部の対談と質問

質問1：『ハムレット』を、お若い頃に読まれたのと、現在とでは、作品の印象は変わりましたか？

お答え：はじめの頃は表面的な意味しかわかりませんでした。来日後、第二層の聖書の影響や深層に潜むカトリック的な意味が次第に分かるようになり、2003年にはメタ・ドラマを意識した研究をシカゴでのシンポジウムで発表し、『ハムレット』の深い意味への理解が深まりました。

質問2：『ハムレット』では、デンマークの王位継承者が死に絶えた結果、敵対していたノルウェーの王子がデンマーク王になって劇が終わりますが、その裏に、エリザベス女王の死後、宿敵だったスコットランド女王メアリーの一人息子スコットランド王ジェームズがイングランド王に即位するという予見的なものが感じられるのでしょうか？

お答え：神父様は直接的なお答はなさらず、『ハムレット』の親子関係と復讐に関して詳しくご説明下さいました。

質問 3 : 400 冊余の御著書の中から一冊を挙げるとしたら、どのご本でしょうか？

お答え : 神父様は、一番最近の *The Pattern in Shakespeare's Carpet* を挙げられました。

質問 4 : シェイクスピアの劇の中で一作品を選ぶとしたら、神父様はどの作品をどういう理由で選ばれますか？

お答え : このご質問に関しては、直接お答えにはなりませんでした。恐らく、連続講座の最終回にお答え下さることでしょう。

最後に、全員でハムレットの『ハムレット』の第一独白“O that this too, too, solid flesh would melt...”と有名な独白“To be or not to be...”を朗読し、第五回目の講座が終了しました。